

教師の
腕前診断文 | 城ヶ崎滋雄 (千葉県船橋市立夏見台小学校)
イラスト | 吉田朋子

今回のテーマ

反発させる前に共感しよう (2)

放課後、鉄棒で遊んでいた佐藤さんに、田中君の投げた石が当たりそうになりました。なかなか謝ろうとしない田中君に対し、担任から相談を受けた山田先生が指導にあたっています。

前号(27号)では、田中君が鉄棒の支柱を狙って石を投げたことまで確認できました。

3 子どもに共感する

山田先生は、支柱を狙った理由を聞きたくありませんでした。おそらく、的当て、「ストライクゲーム」をやっていたのだろうと推察できます。

Q3

質問の仕方はどうしますか。

- ① 的当てをしていたの？ それとも支柱を壊したかったの？
- ② なんで支柱を狙ったの？

子どもは厳しい叱責から逃れたいと思っています。そうになると、自分に都合の悪いことは言わないようになります。

「②」のように聞かれたら、子どもはすぐに答えず、口ごもります。「何となく」などとうやむやにします。これは防衛本能です。多分、大人もそうでしょう。

ところが、教師はそれを「隠そうとした・騙そうとした・嘘をついた」とみなし、許せない思いが徐々に深まってきます。

曖昧な態度を見た教師は追い詰めるように、子どもに「なんで」と聞き続けます。「ちゃんと理由を言いなさい」と次第に感情的になり、論

す意識が遠のきます。

トラブル指導のカギは、過ちを繰り返させないことです。

そのためには、子どもに、自分が何をしてしまったのかをはっきりと認識させることが大切です。無意識に行っていたことを自覚させるのです。

事実を素直に認めさせるために、「①」のように選択肢で問いかけ、yesを引き出します。二者択一ならどちらかを選びます。選択肢の中に該当する回答がなければ自分から真実を言おうとします。

選択肢を与える子どもは思考が集約されま

す。田中君は「的当て」と答えました。

ここまでは事実関係の確認です。子どもは責められていると感じているはずで、「先生は自分のことを受け入れてくれない」と身構えています。

ここからが指導の本番です。子どもの気持ちを受け入れ、共感していることを伝えます。

山田先生が「的当てをしていたのか」と共感することで、田中君は「先生は支柱を的にして石を投げるおもしろさをわかってくれるんだ」と心を開きます。「遊び」のおもしろさを理解してもらったと安心するからです。

先生も昔は子ども。的当て遊びの楽しさは理解できます。1回目で当てられたら何回続けられるか、連続を逸しても合計で何回当てられるかを競いたくなります。外れても「次は必ず当たてやる」とリベンジに燃えます。当たっても外れても、的当ては楽しいものです。ですから、的に向かって物を投げたいという気持ちには共感できます。

4 相手の思いを想像させる

しかし、だからといって、石を投げることに同意できません。佐藤さんは怖い思いをしませんでした。それを田中君にわかしてもらわなければなりません。佐藤さんの恐怖心を理解できれば、心から謝罪できるはずで

Q4

佐藤さんの恐怖心を感じてもらうには、どんな問いかけをしますか。

- ① 「どれくらいの力で投げたの？」と聞く。
- ② 手の幅を示し、「どれくらいの力で投げたの？」と聞く。

「①」のように聞くと、子どもは「軽く」と答えます。そのほうがしかられないからです。力の加減は感情の高低に比例します。本人が意識しなくても、感情が高まると力が入ります。反対に落ち着いている時は、力まず、力が抜けるものです。

力の加減は目に見えません。他者には力を入れていないように見えても、本人にとってはそうでもなかったということがあります。

そこで、「②」のように例えの基準を示します。最大を10点として聞く方法もありますが、手の幅で示すほうがいいようです。まず、教師は胸の前で合掌します。次に、合わせた手のひらを徐々に広げます。ちょうど「小さい前ならえ」くらいにします。場合によっては、肩幅まで広

教師の腕前が試される、学級経営のひと工夫。

ベテラン先生によるケーススタディです。

こんな時、あなたならどうしますか？



5 自覚を促す問いかけ

田中君は佐藤さんに謝罪する気持ちになりました。

しかし、すぐには謝罪に行きません。練習をしてから行くことにします。

けてもいいでしょう。そのままの状態でも聞きま

「これが最高の力だとしたら、石が佐藤さんのほうに飛んだ時の力はどれくらいだったかな」

田中君は両手の間を狭めたり広げたりします。やがて、「これくらい」と手が止まります。

「結構強く投げたんだね。それが佐藤さんのそばをかすめたらビックリしちゃうね」

子どもはコックリ頷きます。佐藤さんに怖い思いをさせたことがわかったようです。

石を投げた強さの程度は主観なので、他人にはわかりません。数字や「手」を代わりにすれば、主観が客観に変わります。

Q5

練習のねらいは何でしょう。

- ①ちゃんと謝罪できるかどうかを確認する。
- ②同じ過ちを繰り返さないという自覚を促す。

①は誰のことを心配しているのでしょうか。おそらく、山田先生自身です。山田先生は田中君を指導しました。石を投げることの悪さを教えました。田中君も理解しました。悪いことをしたら謝るのですが、その方法も教えませんでした。

山田先生の指導の集大成が謝罪です。自分の指導力を問われます。だから、田中君にはちゃんと謝罪してほしいのです。

一方、田中君本人の心配は「ちゃんと言えるかな」です。申し訳ないという思いよりも、謝罪の「台詞」を淀みなく言えるかどうか心配なのです。

これでは、田中君の謝罪の目的は「謝罪の言葉を口にする」ということになってしまいます。そこで、②のように自覚を促すために練習をします。

トラブルを繰り返す子どもはそのたびに「反省」を求められます。「とりあえず謝罪すれば先生の怒りは収まる」ということを学習します。

中には「十分に反省している」「後悔の念を強く感じる」と思わせる子どもがいます。どうして、そんなに上手に反省できるのでしょうか。それは、反省慣れしているからです。教師からしかられるたびに理想的な反省を求められ、それが定着してしまっているのです。おかげで、

どうすれば改悛の状（情）ではありません）が顕著だと映るかを学習しているのです。

反省の意を表すことが大事なのではありません。自分の行いが誰に迷惑をかけているのか、社会的にどんな影響があるのかを自覚することが大事なのです。

過去を教訓として、正しい未来を築くようにお手伝いするのが教師の役目です。

前号で、「なぜ」は相手の過去を否定する問いかけだと書きました。しかし、いかなる場合も「なぜ」は御法度（ごはつど）だというわけではありません。「なぜ」は、未来を問う時に有効です。「なぜ石を投げたこと、当たり前そうになったことを謝罪しようと思うの？」と問いかければ、

田中君は「だって、石を投げたら危ないし、それが当たり前そうになって怖い思いをさせたから」と答えるでしょう。

未来を問うかけの時の「なぜ」には「田中君は良い子なんだよね」という山田先生の期待が込められています。田中君はそのことよって「先生に認められた」という安心を覚えます。安心感はいの信頼関係の礎（いしずえ）です。

無自覚に行っていたことを「なぜ」と問われることで、自分の考えを整理することができます。整理することには「無自覚」が「自覚」になります。これにより「無自覚」が「自覚」に変容します。事を為す前に善悪の判断をするようになります。

田中君は今後、的当ての用具として石を使おうと思わなくなります。また、石を見ると「危ない」と判断して安全な場所に移動します。「投げる」から「置く」に変容するのです。